近現代日中米文化の諸相に見る相関関係

Correlations in aspects of modern and contemporary Japanese, Chinese and American culture

松村 茂樹[1]，渡邉 顕彦[2]，松田 春香[1]，関本 紀子[1]，木村 淳[3]，黎 静如[4]，利根川 千枝子[5]
Shigeki Matsumura[1], Akihiko Watanabe[2], Haruka Matsuda[1], Noriko Sekimoto[1], Jun Kimura[3], Seijo Rei[4], and Chieko Tonegawa[5]

[1]大妻女子大学文学部，[2]大妻女子大学比較文化学部，[3]大妻女子大学非常勤講師，
[4]大妻女子大学大学院博士後期課程，[5]大妻女子大学大学院修士課程
[1] The Faculty of Humanities, [2]The Faculty of Comparative Culture, [3]Part-time lecturer,
[4]The Doctor's program, [5]The Master's Program, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：近現代，日中米文化，相関関係
Key words：Modern and contemporary,　Japanese, Chinese and American Culture,　Correlations

１．研究目的

ボストン美術館蔵 呉昌碩「与古為徒」扁額

米国のボストン美術館の東洋美術展示室階段吹抜けの壁に詩書画印四絶をもって「中国最後の文人」と称せられる呉昌碩（1844-1927）の「与古為徒」扁額が掲げられている．この扁額は，当時上海在住の漢学者・長尾雨山（1864-1942）が，壬子（1912）秋杪（旧暦９月），ボストン美術館中国日本美術部長・岡倉天心（1863-1913）より委嘱されたボストン美術館鑑査委員就任記念に，隣人関係にあった呉昌碩に揮毫を依頼し，黒漆木額に仕立て，ボストンの天心宛に送ったものである．

この扁額に篆書で題されている「与古為徒〔古（いにしへ）と徒（ともがら）為（た）り〕」は，『荘子』「人間世編」の「成而上比者，与古為徒〔成して上（いにしへ）に比（なぞら）ふ者，古（いにしへ）と徒（ともがら）為（た）り〕」に見え，孔子とその弟子の顔回との問答の中で，顔回が，処世の方法として，君主に自分の意見を言う場合，古にかこつけるようにすれば，直言しても憂いはなくなり，これを「古と仲間になる」と表現した一節である．

これに呉昌碩は，以下のような跋語を付している．

波士敦府博物館蔵吾国古銅器及名書画甚多，鉅観也．好古之心，中外一致．由此以推，仁義道徳，亦豈有異哉．故摘此四字題之．
安吉呉昌碩．時壬子秋杪，客扈上．
〔ボストン府博物館（ボストン美術館）蔵のわが国の古銅器および名書画は甚だ多く，壮観である．好古の心は，中国も外国も一致しているようだ．ここから推し測るに，仁義道徳もまた，どうして異なることがあろうか．故にこの四字を選んでこれに題した．
安吉の呉昌碩，時に壬子（一九一二）秋杪（旧暦九月），扈上（上海）に客寓している．〕

まず，呉昌碩は，ボストン美術館には中国の「古銅器および名書画」が多く蔵されており，外国である米国にも「好古の心」があるという．「好古の心」とは，理想的な統治が行われていた古代を好み，古代に返ることで理想の世を復活させようとする儒教とりわけ呉昌碩が属していた古文学派に基づく考え方である．そして，米国にも同様の考え方があり，儒教が重んじる「仁義道徳」も同じように存在するはずであるから，この「与古為徒」四文字を題したというのである．

ただ，もとより当時の米国には，このような考え方は基本的に存在していない．そのような中，前出の岡倉天心は,「アジアの思想と文化という信託の真の貯蔵庫」(『東洋の理想』) たる日本こそが米国ひいては西洋に「アジアの思想と文化」を伝えることができるとし，ボストン美術館でもその役割を果たそうとしていた．だが，その天心にも理解が及ばない点があった．それが当時の中国で行われていた儒教の古文学派による考証学である．かくして天心は，当時上海で呉昌碩と交わることにより考証学に通じていた旧知の長尾雨山に教示を求めるべく，ボストン美術館鑑査委員を委嘱し，雨山はそれに応え，その記念としてこの扁額を贈ったことは前述の通りである．

つまり，このボストン美術館にある呉昌碩「与古為徒」扁額から見えてくるのは，米国の西洋文化の直中に，日本が媒介となって，中国の儒教文化を伝えるという日中米文化の相関関係である．このような相関関係は，現在に至るまで，その諸相において形を変えながら存在し続けているのではないか．本研究では，この学術的「問い」に解答を与えたい．

本研究の目的は，近現代日中米文化の諸相に見る相関関係を明らかにすることである．たとえば，近年，伊藤亜紗 中島岳志 若松英輔 國分功一郎 磯崎憲一郎『「利他」とは何か』(2021.3.31 集英社新書) などにより注目されている「利他」という考え方は，2008 年，米国のスタンフォード大学医学部にジェームズ・ドーティ（James Doty）博士によって設立された「慈悲と利他の研究教育センター（Center for Compassion and Altruism Research and Education)」の活動によって，世界的に知られるようになった．「慈悲（Compassion）」や「利他（Altruism)」という東洋的な考え方を米国に取り入れ，問題解決をはかろうとする姿勢は世界的な共感をよび，日本でも関心を集めることになったのである．

このように，もとは中国や日本の文化に基づく東洋的な考え方であっても，米国ひいては西洋の文化に取り入れられることで，その本質解明が進むことがよくあり，この相関関係を明らかにしようとする点に本研究の独自性と創造性がある．

２．研究実施内容

本共同研究プロジェクトの研究代表者および共同研究者は，日中米を含むアジア太平洋文化の研究を進めている．よって，それぞれの研究成果を発表し，討論することにより，近現代アジア太平洋文化の相関関係を明らかにできるのではないかと考えた．そこで，2022 年 7 月 4 日（月）に研究代表者および共同研究者全員による打ち合わせ会議をおこない，上記の方針を了承し，11 月にシンポジウムを開催することになった．

かくして，2022 年 11 月 28 日（月）16:30-17:50，大妻女子大学千代田キャンパス G311A アクティブラウンジにおいて，シンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」を開催した．当日は，研究代表者・共同研究者計 7 名の話題提供のあと，フロアー来場者を交えての質疑応答がおこなわれた．その際，大妻女子大学メディア教育開発センターに録画録音を依頼し，株式会社アラジン/データグリーンに音声データを文字起こししてもらった．そして文字起こし原稿を発言者全員に修正していただき，研究代表者の松村が取りまとめ,「シンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」報告」を作成し，『人間生活文化研究』に投稿した．

３．まとめと今後の課題

このシンポジウム開催によって，アジア太平洋の文化はつながっており，日本はそのハブになっていることが見えてきた．また，キリスト教文化がアジア太平洋の文化に大きな影響を与えていたことも明らかとなり，今後の研究の新たな方向性をうちだせた．

４．この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1] シンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」報告 『人間生活文化研究』投稿済

②学会発表

[1] シンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」2022 年 11 月 28 日（月）16:30-17:50，大妻女子大学千代田キャンパス G311A アクティブラウンジ

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K2214）「近現代日中米文化の諸相に見る相関関係」（研究代表者：松村茂樹）を受けたものです．